

BRICsと一次産品市況

丸紅経済研究所所長 柴田明夫

近年の一次産品市況急騰の背景には、BRICs（ブラジル、ロシア、インド、中国）諸国の本格的な工業化があります。原油を先駆けとする価格の上方シフトは、すでに非鉄・鉄鉱石・石炭などの資源にも伝播^ば。今後、穀物はじめ砂糖・コーヒー・天然ゴムなどの農産物市場でも本格的な価格体系のパラダイムシフトが生じる可能性が高いと思われます。

エネルギー・資源需要に直結する BRICsの工業化

代表的な一次産品指数であるロイター・ジェフリーズCRB指数（以下RJ・CRB指数、1967年=100）は、2006年5月には360ポイン

PROFILE

柴田明夫
しばたあきお



1951年栃木県生まれ。76年東京大学農学部卒業後、丸紅に入社。鉄鋼第一本部、調査部を経て、2000年に業務部（丸紅経済研究所）産業調査チーム長。02年に同研究所主席研究員。03年から現職に。

トを突破し史上最高値を更新しました（次ページ図）。しかし同指数は同年8月後半には急落しました。10月現在は300ポイント前後までの調整局面にあるものの、筆者は、一次産品価格は10年代半ばを終着点とする長期上昇局面にあり、足元はその一時的調整とみています。その根拠が本格的にスタートを切ったBRICsの工業化です。

足元の一次産品価格の調整は、原油の値下がりが大きく響いています。06年前半にかけて高騰していたニューヨークWTI原油価格（期近）は、7月に1バレル78ドル台の史上最高値を付けた後、8月後半には急落に転じ、60ドルを割り込んでいます。この背景には、安い原油時代が続いたことで開発が抑制された一方、2000年代に入るとBRICsなど世界人口の4割を超える諸国が、本格的な工業化の過程に突入し、猛スピードで先進諸国へのキャッチアップを進めている構図があります。

ちなみに、BRICsに共通するものは、①人口・経済・資源大国で潜在成長力と市場性に富むこと、②しかも、その高い成長ポテンシャルを現実のものとする可能性が高いことです。直近の国際通貨基金（IMF）、米商務省などの資料をベースにした世界経済見通しをみると、近年の一次産品価格の高騰にもかかわらず、06年の世界経済予測は5.2%成長と好調です。ただし、先進国は3.0%の成長に対し、BRICsを中心とする新興市場国は7.2%と倍以上の伸びをみせています。これらの数字が示しているのは、世界経済を牽引して

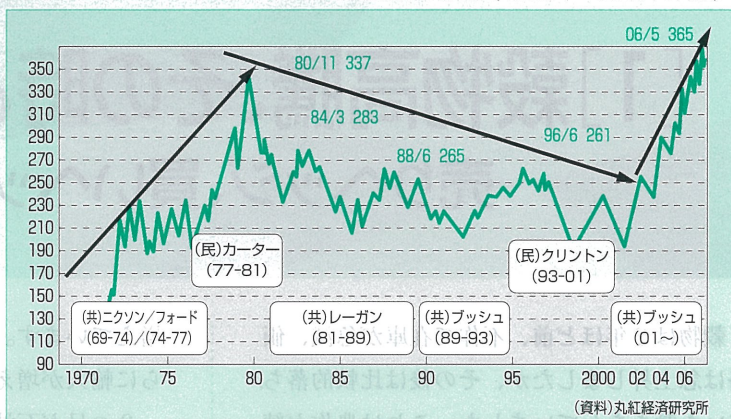
いるのは人口約30億人のBRICs諸国の経済発展であるという点です。成熟化しソフト化した先進国経済がいくら成長しても一次産品の需要には直結しません。しかし、BRICsの成長は、「モノづくり」であり、そのためのインフラ整備です。それは、地球規模でのエネルギー・資源多消費型経済

発展であり、需要ショックといった形で世界の石油需要の急増と直結します。その結果、まず原油の供給余力が低下し、投機マネーの流入と相まって原油価格の高騰を招きました。原油市場で起ったことは、非鉄・鉄鉱石・石炭などの資源にも伝播^ば。今後、穀物・砂糖などの農産物でも生じる可能性が高いと思われます。

BRICsが投げかける資源枯渇という問題

この意味では、06年4月以降続いた原油価格70ドルのメッセージは、液体状で採取できる在来型原油資源の枯渇、いわゆる「ピークオイル問題」が指摘されるなかで、非在来型エネルギーや代替エネルギーの開発など、できるだけ早い段階で、その枯渇時期を先延ばしする緩和策を打ち出さないということです。生産コストからみた原油価格は、1バレル2～3ドルといった中東での安いコストが適用されるのではなく、深海や極地でのハイテク・ハイコストの油田開発や代替エネルギー開発を進める際の限界コストであるはずで、それは、50ドルや60ドル台では安すぎます。仮に、原油価格が50ドル近辺で定着した

ロイター・ジェフリーズCRB指数の推移(1967年=100, 19商品)



場合、中国はじめ世界の石油需要が再び強まるなかで、代替エネルギーを含めて新規エネルギーの開発にはさらに慎重になり、結局、原油市場での供給余力が低下し、再び価格急騰をもたらすだけです。

また、一次産品の特徴は、その偏在性（その結果、供給が寡占状態にある）、有限性（それ故、価格が高騰しやすい）、戦略性（政治的に利用されやすい）にあります。このため、いったん枯渇の危険が生じると、その権益確保をめぐる国家間のパワーゲームが繰り広げられることになります。特に、近い将来懸念されるのが、レアメタルの供給です。自動車や情報技術（IT）関連製品などのハイテク製品に不可欠で、日本の技術力の源泉であるレアメタルの大半は、中国やロシアなどの特定国に偏在しており、これら諸国が国家管理を強めれば、日本はたちまち供給源を絶たれます。一次産品問題とは、着実に進む資源枯渇という現状を前に、我々はどうしたらよいのかという問題なのです。必要なことは、省エネルギーや省資源、代替エネルギーや代替材料の開発などを通じて、ピークの時期をいかに先送りするかという緩和策であり、そのためには一次産品価格の全般的な上方シフトが不可欠になっているといえるでしょう。